

# 第15回「文芸思潮」現代詩賞 発表

## 第15回「文芸思潮」現代詩賞

第一五回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきました。まことにありがとうございます。おかげさまで三十七名という多くの方にご応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に集まった応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通じた作品を対象に、十一月十日、松尾真由美、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀賞・優秀賞を掲載させていただきますが、奨励賞作品も、次号以降できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただきます。

現代詩賞の授賞式は、残念ながら今年も割愛させていただきます。賞状・賞品・賞金などは明年一月下旬に直接受賞者に発送させていただきます。

第一六回「文芸思潮」現代詩賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。お待ちしております。

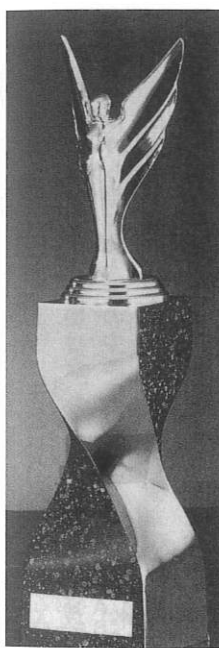
「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

## 最優秀賞

「聖遷」「わたしさえいなくなれば」

「AO」

佐藤孝博（千葉県浦安市）



## 優秀賞

「ゼブラゾーンより右折をはじめ」

「anata」「僕らの二十一世紀」

木田昨年（福岡県久留米市）

「きみはすでに」「無題帝国より」

青木聡汰（神奈川県横浜市）



## 奨励賞

「暝」「霧子」「手記」 今井 悠（宮城県仙台市）

「裸足の醜女」「夜の沈殿物」「朱炎の神」 淡谷十森（神奈川県横浜市）

「明滅」「わたくしという湿り気は」「触角」 秋山聡子（東京都目黒区）

「満天星つつじ」「子返し絵馬」「不在証明」 遠藤芳子（東京都狛江市）

「第八世界自己構築・崩壊論」抄」「灰燼」「引馬」 燻人（埼玉県川口市）

「春の受肉」「白昼夢」「散華」 隅田聖美（大阪府大阪市）

「あくりる あんぐる」「おぶじえ」「ただいま」 中村郁恵（北海道札幌市）

「台所」「修行」「険」 麻生ゆり（福岡県北九州市）

「recordare」「狼歩む風の小路」「Flourish」 浅見龍之介（埼玉県草加市）

「嗚咽」 十路田道広（福岡県福岡市）

「縄文の女神」「西ノ前遺跡」「合掌土偶」「風張遺跡」 清水一美（東京都立川市）

「蒼穹に染まる若葉」「遊女の手毬唄」「夢追いびと協奏曲」 渡邊章夫（愛知県豊橋市）

## 選評

## 詩を読むひとの具体として

## 松尾真由美

今回の選考では当選作は出たものの、優秀賞を二作品にしか与えられず、応募作品全体の印象としては低調な感じを受けた。常連の応募者もいれば、初めて作品を応募する方もいるし、詩の初心者もいれば、詩歴の長い方もいる。こうした状況の中で一括りに作品を語れるものでもないのだが、全体的な雰囲気として、詩から発散されるエネルギーが乏しいように感じられた。

私は授賞式で、詩を書くだけではなく詩集を読んで下さいという話をしている。詩を読むということは己と詩との接点を深めるためであるのだが、そこには、他者の詩の感性によって自分の詩の感性に刺激を加えるということも含まれる。たくさんの詩人がいる。その分だけたくさんの詩のありようがある。詩の方法もそれぞれで、それを知ることによって自分の詩の可能性を信じることもできる。

だが、そうは言われても、詩を始めたばかりの人は戸惑うかもしれない。書店に行っても谷川俊太郎の詩集しかな

を読んでいる詩人はいるだろうし、勉強する教材としての価値もある。私個人はほとんど読んでいないけれど、読める人は全巻読んでいただきたいし、読むのが大変と思う人は何冊か読んで好みの詩人を見つけしてほしい。詩を書いて間もない人はそうして好きな詩人を見つけ、徹底してその詩の方法を理解する。自ずと影響を受けるだろう。そして、今自分の詩に行き詰っている人は自分の詩とは違う方法を取る詩人たちの作品を読む。固まっている自分の感性に刺激を与えてあげるのだ。

また、現代詩文庫は第二期として近代詩人篇もある。北村透谷、釋迢空、中原中也、石川啄木、尾形亀之助、富永太郎、北原白秋、金子光晴、萩原朔太郎、大手拓次から始まり四三人の詩人が網羅されている。興味のある方はこちらも読んでみるといい。

あえて機械的に詩人たちの固有名を上げたのは少しでも詩人を知ってもらいたいからで、名前を出せばその像が浮き上がってくるようなことの実感も湧く。まだまだいい詩を書く詩人はいっぱいいるし、外国の詩人だとしても。興味を広げていくことは己の詩の領域を広げていくことにもなる。もちろん、詩を読めば簡単に詩が書けるといふものでもないし、詩を読む以外にも詩的な刺激はある。詩だっぴり一冊の詩集として読んでほしい。詩人は装幀も凝るし一冊にまとめることで生きる詩を意識する。一冊の詩

い、なんてこともあるだろう。なので、今回は詩を読むということにおいて、具体的な一例を上げてみたいと思う。皆さんの一助となれば幸いである。

詩を専門とする出版社の思潮社に現代詩文庫というものがある。一詩人の選詩集と詩人論・作品論が併録され、学生にも読めるようにと値段も手頃なものだ。田村隆一、谷川雁、岩田宏、山本太郎、清岡卓行、黒田三郎、黒田喜夫、吉本隆明、鮎川信夫、飯島耕一、現代詩文庫一から一〇番までの詩人である。そして新装版は若手の詩人から始まり、蜂飼耳、岸田将幸、中尾太一、日和聡子、田原、三角みづ紀、尾花仙朔、田中佐知、続々・高橋陸郎、続々・新川和江。二〇一から二一〇番までの詩人である。故人になつてしまった田村隆一たちも現役で活躍中に出して、現在二二九番まで二二九人の現代詩人が出版されている。

昔、学生運動が盛んだった頃の学生たちは、詩を書かなくても現代詩文庫は読んだという。議論好きの若者たちにとって、現代詩的な要素も自分の思想の中に取り入れるということとは当然のことであつたようで、一から一〇番の詩人を見ただけでもさもありなんという気もするが、当時の風潮はお手軽だったり気楽だったりするものよりも、単純さや短絡さとは正反対の現代詩は受け入れられていた。

たしかにこの現代詩文庫は詩人論・作品論があることで一詩人をより深く知ることができ、今でも現代詩文庫全巻

集は存在する何かだ。ただ、現代詩文庫を知らないということもどうかと思うし、こうした幅広く詩人を紹介するシリーズを読む機会が必要な人もいるのではないかと考えた。

講評に入る。当選作の佐藤孝博は応募作三作品とも安定した力を見せた。あえて漢字を駆使することも、大胆な形容も、大きな世界を創造する意図で貫かれるゆえ空転せず、むしろ一語一語に力強さを感じさせて独自の世界観を提示する。聖音をオームと読ませ、聖遷をヒジユラと読ませ、齋れをハレと読ませ、いくつも出てくるカタカナのふりがなも独特なもので、迂闊にやれば必ず失敗するそれらも、佐藤の世界ならではの必然性を湛えつつ世界を進ませる手段として、面白みを与えている。異世界の想像には古典も使われるが、どこかしら乾いた雰囲気漂わせ、それがクールさとして若者の現在性を生じさせる。「不埒にも愛のみを生きえずして零れ跪き／なしくずしの死に苛まれていった報い／洗神への忘我による成れの果てが／背を包まる蚕の撚り糸から全生命の邂逅へと／尽きせぬ果報によって贖われていた」(「わたしさえいなくなれば」部分)。不埒、なしくずし、忘我、全生命など大きな言葉を使っている。普通は使えない言葉だ。だが、その描写はとても丁寧で何がどうなったかが読者によく伝わる。書きたいものの動作が具体的に入ってくることで、大きな物語も

地に足がつく。こうした詩の自由もある。詩は繊細さが表面に出てくるのが常であるが、そうしたものを隠し持ちながら、骨太の詩を表出させることで個性が確立されている。

優秀賞の青木聡太は傾向の違う二作品のどちらも現代詩として成立している。音楽的に優れている青木の特徴は、言葉の流れをメロディーとしてとらえ、そこに言葉をどどん投げこむ。投げるといふより乗せるだろうか、それが展開をスムーズにさせ、作者も見えない先の世界へ言葉を進ませる。音を出すように簡単に言葉は出ない苦労があっても読者はそれを感じず、次々と展開を楽しんでいけるのだが、難解さはあるだろう。何を書いているのかということとが読者には曖昧であるからだ。だが、こうした作品ではこの作者が何をいいたいかではなく、どのように繚乱する言葉が展開を見せてくれるかを楽しむことが先決だ。しかも青木の作品に軽さはない。詩が美術に寄ればイメージの凝縮によって像が立つ。読者は見えるからわかりやすい。音楽に寄れば流れによって言葉は放たれる。よって凝縮性が壊され、像は逃げる。わかりやすい作品にはならない。作者は気にしなくていい。言葉のセンスもいいし、今は書きたいものを書くだけ書くということを書けばいいだけだと思う。それで作品の質は向上する。

優秀賞の木田昨年の作品には少し驚かされた。初めての奨励賞の浅見龍之介の作品も音楽的で、自分のリズム感を持つて、一字あけが目立つ作品の一連が六行、一連が七行、一連が一〇行と作品ごとにまとめている。一字あけによって一拍ずつアクセントがつく感覚は面白いものだが、必要のない言葉もそのアクセントでごまかされてしまう。書いたあとに作品を精査することと、若い詩人の詩を読んでもみることも必要だろう。

奨励賞の今井悠「手記」のタイポグラフィは成功している。微妙なところでクリアし、かつ、見せることの意味が饒舌すぎる性質を上手に抑えている。作品前半は「貴方」に対して辛辣なのだが、作品最後の一行で優しさが立ちのぼって読後感が爽やかだ。「霧子」はやりすぎ。もし、これをしたいのなら一個置くのではなく、何個も作って読者を驚かすような作品にする。「瞑」の前口上はいらぬ。それと一行目の出だしもいらぬ。「バスタブの中から」で始まっても読者にはわかる。同じことを違った言い方で重複させないように気をつけて作品を見直すこと。

奨励賞の淡谷十森の作品には「私」ではなく主人公がいることに特徴がある。「裸足の醜女」はロックスターの話だし、「夜の沈殿物」もぼくの物語として破綻なく「朱炎

応募かと思うが、絶望と清潔感が簡潔な形で提示され、ここに影のように叙情が加わっている。悲しいことを悲しいと書かず、苦しいことを苦しいと書かないで、詩に表すということが詩の第一歩であるとして、すでにそれは超えている。余計な言葉も使われていない。作品中に「ぼくら」という不特定多数の人称を入れることで、作品に柔らかさを出し読者を引きこむ。「ぼくらの存在を試す春の交差点」左車線が寒色系、対向車線に暖色系／ぼくらは見分けることに疲れてしまった／（「ゼブラゾーンより右折をはじめ」第一連）。この「ぼくら」は作品に「ぼくら」であるのだが、読者もまた読むことによって「ぼくら」のうちの一人になる。交差点に在るのは私だ。詩の技術ともいえるがさり気なく書かれていて好感が持てる。また、こうした体感性は詩に説得力を与える。

奨励賞の中村郁恵の作品は、まず人とは違う視点での詩の想像がある。「あくりる あんぐる」は三角定規（作品を読んでわからない人も多いだろう）、「おおじえ」はポスト（わからないかもしれない）、「ただいま」は点を拾うという発想から詩が始まる。「ただいま」などは難しいことに挑戦していると私は感じたが、どの作品も一定の描写力があり、そこに詩が収まってしまっている感じも受ける。展開にシニールレアリスムのものを持つてきてもいいかもしれない。視点が独特だから構築は手堅くなるので

の神」の金魚の様子も鮮やかに描写される。作者は観る人なのだろう。ただ作品タイトルが古い。詩の中にある定型的な言葉使いは避ける。「夜の帳」「恵みの雨か無情の

雨か」など書いたあとで見直す。若いことから若いセンスを自分の中から引き出してほしい。



### 松尾真由美

まつお まゆみ

詩集『燭花』（思潮社）詩集『密約—オブリガート』（思潮社）第52回H氏賞受賞  
詩集『揺籃期—メッサ・ヴォーチェ』（思潮社）詩集『彩管譜—コンチェルティーノ』（思潮社）詩集『睡濫』（思潮社）詩集『不完全協和音 consonanza inperetto』（思潮社）  
詩集『雪のきらめき、火花の湿度、消えゆく蕊のはらかな記憶を』（思潮社）  
BOX詩集個展用パンフレット詩集『装飾期、箱の中のひろやかな物語を』  
現代詩文庫『松尾真由美詩集』（思潮社）  
詩集『花章—ディヴェルティメント』（思潮社）  
詩集『雫たちのパヴァーヌ』（アジア文化社）  
アンソロジー『現代詩最前線』（北溟社）『小野十三郎を読む』（思潮社）  
『短篇集 夜』（驢馬出版）『ふるさと文学さんぽ 北海道』（大和書房）  
北海道新聞文学賞（詩部門）選考委員

佳作

- 「バティック幻想」「黒猫」「ミモザの葉」田中淑恵  
 「最後の駅(回帰)」北原 満  
 「二月」「一月」「むね肉」橋いずみ  
 「告状刻下」「追憶」「北の徒然なる」小山田良三  
 「青春のスパーク」「雛の頃」「光のフーガ」嬉代子  
 「夕暮れの空」「とりかえしのつかないもの」  
 「どうして死を選ばないのか」佐藤 裕  
 「本と少女」森 侘介  
 「雨」「星の灯り」「砂の天」宇川榛太  
 「勲章」いしぜきけいこ  
 「砂漠」スミカゼイツカ  
 「光にむかう睫毛」貝類  
 「BORDERLINE」「カラフル。」「裸—NUDE—」田口千尋  
 「哀色の炎」「闘病」「セミダブルの棺」そらことつむぎ  
 「残響」「エビグラフ」藤わか  
 「超躍」「誠実」「花」かまましり  
 「五年生存率」「廃屋」「庶子」田村全子  
 「寂光の園」添美  
 「エデンの端っこへ」「プロペラの折れた地球」「天国はもう、すぐそこ」Keisei  
 「暗室」「戦場の汽車」大越宏志  
 「瞬」津田悠宇

- 「焼け野原」七羽鳩子  
 「黒い窓」あおい満月  
 「赤い百合の花守」「さいごの求愛」若名有希  
 「時代の音 大正」「九死に一生を得た」「運命の星に見放されて」西條由美子  
 「葬送の季節」「最涯ての人」「私は、きりんになって」千葉真理絵  
 「享楽」「独立者」「水面」虚空蔵詩門  
 「わたしの風船」絹本ゆい子  
 「帰郷」「誰の部屋にも螢はいる」「崩壊する佐々木恵子ちゃん」井上政樹  
 「もつれた糸くず」「しんしん雪の舞う夜に—父への鎮魂歌—」「境界」すぎむらみずほ  
 「吠える(又はマシンガンを撃ちまくる)」「どうしようもない恋の唄」阿江栄章  
 「罵詈雑言」高倉麻耶  
 「最後の土壇場で」「焼け跡のマリア」河合夏帆  
 「涙」「岬に暮らして」天ヶ谷麗  
 「タルトの舟」加勢健一  
 「まぼろし」「フフホト」  
 「やわらかいおり」「Pipi粘膜」「希望の河」「渡辺八景」  
 「揺らぎ」「ベイザージュ」「ムーンダスト」月海水雲  
 「透明な波」「バッテリーボックス」「山の駅」柏原 宥  
 「螺旋」「黎明」インバ  
 「満天の星空の下で」深雪 朔

- 「赫い人よ」石原佑弥  
 「種の詩」「ドッベルゲンガー」「映画観」元澤一樹  
 「遠い記憶」「独りじゃない」「橋」桐木平十詩子  
 「二十歳だった頃のノート」「三十歳だった頃のノート」絹本鯛地  
 「四十歳だった頃のノート」  
 「曇り空」「潮流」「春色の風」名もなきサラリーマン  
 「柱状節理/マントウナン」鈴木 修  
 「口頭発表」「零下五度」「収束」小径 章  
 「みそぎ」「劇場」「乳呑児」野宮有姫  
 「終末沼」「冬と眩暈」「香水の日々」田中知織



松尾真由美 新詩集「雫たちのパヴァーヌ」  
アジア文化社刊 送料別1760円(税込)

優秀賞レベルの貧困

五十嵐勉

第一五回現代詩賞は、全体的には昨年と同じような結果になった。優秀賞のレベルが少なく、奨励賞、佳作のレベルの作品が犇めき合う形だった。入選以上の作品は確かに多くなり、全体に底が上がっていることは確かだが、やはりトップレベルが少ないのは、もの足りなさを覚える。詩に賭ける熱量が下がっているのか、ある程度の所で甘んじているのか、技術的な表現力が足りないのか、この傾向をどう見るかは判断が難しいところだ。しかし一方では準トップレベルがこれだけの賑わいを見せていることが逆に何かを生み出しつつある胎動とも受け取れる。ここからさらにレベルの高いものが浮上してくるようにも思える。それらを汲み取りながら、評を進めていきたい。

優秀賞作品が少ない分、目立ったのは、最優秀賞の佐藤孝博氏の「聖遷」「わたしさえいなくなれば」「AO」である。詩の言葉の凝結度、飛翔度は際立っていて、他の追随を許さなかった。この言葉の輻輳性および紡ぐ力は、一つの才能であって、巨大な鳥の滑空力を想わせる。留まることを知らないようにさえ見える言葉の紡績力は、壮大な宇宙の河をさえ連想させる。前回、前々回に比べて、日常的

な日本語からさらに他世界の言葉をも引き入れてきて、世界展開をいっそう豊饒にしている。また結晶度も一段と高いものになっている。「和統の光冠が天赦した」とか「炎天下で染まり高らかな獄となった神威からの純然たる石たちへの潔めの累積の果てに」とか「嵌合体から枷を外す」とか、ルビを使った異世界の言葉の装填も、世界を拡張する効果を發揮している。量的にも、三作とも安定した力を見せている点でも、際立っていた。

注文を言えば、これらの詩には壮大な言葉の輾転はあるが、流れがない。総体としての造形や構築が感じられない。言葉をつぐ力が、例えば煉瓦や石を積み上げていくように、無機質の造形となっていて、息づく総体として連動していき、動き出していない。だから、全体を読み終わって、はて、何が書いてあったか、心もとないものが残る。その言葉に酔わせられているときは、感心はするし、言葉によるイメージの飛躍には圧倒されるもの、よく振り返ってみると骸の上を歩いてきたような虚しさが残る。これをどう克服するかが、今後の大きな課題になるだろう。

優秀賞レベルの貧困は、受賞者二人にも感じることで、私自身の評点は、かなり辛いものだった。木田昨年氏（妙なペンネームだが）の三作「ゼブラゾンより右折をはじめめる」「anata」「ぼくらの二十一世紀」は、言葉がやわらかで、日常の感触を生かした実感の自然な舞がある。「ゼ

ブラゾンに風が吹く／犬みたいな塊がびよびよと渡る」といった率直な感覚の世界に時折り走る鋭い切りつけが快いアクセントをなしている。「言葉はいつも死産ですか」などの切れ味は光っている。「ぼくらの二十一世紀は／その日たまたまこじ開けられたマンホールの蓋」などの表現も、日常の裏から表のからくりを暴いていて、その素朴な発想に快い透視の旋律が奏でられる。ただ、どちらかと言えば小粒であり、都会的なセンスのよさ以上に、大きなものを感じることはできない。世界を両断するような迫力のあるものを期待する私としては、これで満足してほしくない、もう一步の踏み込みと気合を要求したくなる。小器用なまどめることから脱して、もっと憎悪や怒りをこの世界におぶつける、負の迫力がほしい。

もう一人の優秀賞、青木聡次氏は、以前にも優秀賞を受賞したキャリアを持つが、詩の内質に変化が見られる。前は空想や抽象に徹した、自由闊達な飛躍があったが、今回の「きみはすでに」「無題帝国より」の二作品は、説明的、散文的になっている。書き出しにしても「G線上の無限に永いAriaを歌った」は、「G線上のAria」というあまりにポピュラーなタイトルがあるので、これだけでそれによりかかったバリエーションであるという先入観を持たせてしまう。ルビに英字のふくらみを持たせているものの、言葉が妙に生活的な引き摺りを帯びてしまっていて、

「手紙」「ひとの糸」

後藤 順

「願い」

田中浩司

「ここにいること」「雪解けの風」「道標」小篠真琴

「王子の夢の中」「死というもののは」千葉チエンヅウ

「寝返り」「知らね」「瞳の淵で咲く桜」いでみどり

「金色の夢」「まるせいゆ」

潮江しおり

「夜」「空」

晨道珠暉

「花の巖」「ドライフラワー」

上木戸晃

「遠吠え」「獣かく語りき」「お献立はお決まりですか」

有明灯

「削る」「サハラにて」「祝祭都市」

松本邦夫

「魔王よ」「わが宿命」「そなたに送るバラッド」原 水

「震える時の中で」「緋色のナイフ」「君と僕の距離」

辻本 瞬

「向春狼」「紅玉」「誘惑」

南斗るい

「テトラポッドにて」「はつこい」「或いは現実界へと通ずる」

ワタメピケ

「酸素と映画予告」

岸間さひろ

「買い物リスト」「恐怖の誕生」「タイムラプス」あさとよしや

「夜の学校」「イグアスの滝」「鱒」

井村たづ子

「箱庭」「龍宮建設記」「魚類」

よしおさくら

「享年88歳 7月」「Shit」「火と土」

新村たとえ

「塔」「影」「かさぶた」

遊月飛鳥

「嘘塗り」「中身は真っ赤」

今木紗江

「屈辱」「あなた」「夢」

東風佳子

「矢車草」「宙を飛ぶ」

池山弘徳

「朝の仏問」

奥山美代子

「一一五頁」「熟」つらつら」「狂花」

本多智秋

「花」

木村香奈子

「朝焼けを眺める」「放浪」

石川 新

「よきこと」「なべのうら」

「感謝感激雨霰」

「立てよ芍薬」

いまだまりこ

「発端」「仕舞い」「終焉」

河合麻衣

「鴻雁挽歌」水鳥と二胡と伯父」

白石小瓶

「西暦102019年」

徳田吉映

「雨音にうたう」

由良 佳

「消費」「乳」「ディジー・ダンス」

荒木田慧

「熱帯」「熱帯さながら」「不自然な羅列」

林 永子

「湿り気がまとわりつき、それが払拭しきれない回転の鈍さを帯びてしまっている。」「無題帝国」も散文のぬるさをま

とい始めていて、バズル仕掛けのような技巧を感じるもの

の、詩の翼の自由さは後退していると私は見る。実生活が

入り込んできて、その苦闘の中から真の自由を得ていくと

いうことから、一つの過程として捉えて、その成長を見守

っていく意味で、松尾選考委員に同意したが、私としては、

これから一皮も二皮も脱皮してほしい。期待をこめての受

賞である。

「賞」

優秀賞の二作とほとんど並んでいると思われる奨励賞の三作がある。思いの深さや痛切さでは、こちらのほうが重いかもれない。まず十路田道広氏の「嗚咽」である。「自分の身体が灰になり／無残なこの地を満たしていく／きつとこれが永遠なのだ」という一節が表しているように、世界への乖離と愛着が反発し合う所に言葉が旋律となって生まれてくる、陰影の深淵を得ている。これは前回以上の詩の奥行きを確かに獲得している。この到達は評価すべきかと思つた。惜しむらくはこれ一作で提出してきたところに、厚みの足りなさがあり、損をした。このままの方向で、さらに詩の幅と深さを得ていってほしい。期待している。麻生ゆり氏は、これまでに奨励賞を五回受賞している実力者で、日常の事象に広い世界への変異を展開して、それが透明感のある楽音を奏でていたが、今回は異なった深化を見せていた。「暎」には母親の死が感じられ、肉親の喪失によって湧き出る時間の遡行が、全体の主調となつている。肉体を祖先からの命の繋がりと見る軸が挿入され、それが現実を過去から浮かび上がらせて、自身の性にも波及するところに、これまでにない厚みを感じた。もし母親の喪失からこの深まりが得られたのなら、「暎」を先に持つてくるべきで、その契機によつて「修行」も「台所」も新しい世界を開示してくれたという流れで提出すれば、三篇全体が一つのテーマでしつかり繋がりが、もつと大きく構築

ら、「夜の沈殿物」などに見られる擬態語に安易さが窺われる。「ボツ　ボツ　ボボボ　ボッポ」とか「リリリ……」とか、言葉の結晶や凝結から離れた表現が、詩の流れを大きく損ねてしまっている点が目につく。こうした擬態語を使わないで、それに相当する別な表現を確立すれば一段と高いレベルに昇るだろう。

今井悠氏ももう一段階への意欲を感じる。ただ、それが技巧の方に走って、正面からの挑戦に届いていない恨みがある。「暎」で初めから散文詩の形を入れてしまったことも、読者を導き入れにくい結果をもたらした。「霧子」で横に読ませる唐突な形式も、読者には戸惑いしか与えない。「手記」の活字の大きさを突然変える手法も、奇抜ではあつても効果をそれほどもたらしているようには思えない。技巧は必然性があつて初めて生きているのであつて、驚かせるためのように偏つて受け取られるのは、作者としても本意のほうである。

秋山聡子氏は着想はいいものがあるが、表現領域が意外に狭い。「明滅」は着想だけがあつて、中身はない。こういったものを初めに持つてくるのは、提出方法が甘い。他の二篇「わたくしという湿り気は」と「触覚」のほうがセンスのいい波のうねりを感じるが、本格的に詩に取り組む背骨が見えない。素質はいい。素質に頼つて楽しむのも確かに詩の享受にはちがいないが、しかし優秀賞に肉薄する

が実現したと思われる。提出の順序が違った点が惜しまれる。私としては優秀賞に値すると評価した。

詩が癒しとなつてさらに別な次元に昇華される過程を踏んでいる点で変化が見られるのは遠藤芳子氏の作品である。「満天星つじ」「子返し馬」「不在証明」は、息子を失つた深すぎる傷から、痛みが詩を生む過程をさらに越えて、積極的な豊饒の認識に到達する新領域は、胸を震わせるものがある。ここでは悼みと傷みが、むしろ輝きの源泉に変異して、世界が肯定され、まぶしいものとして現れてくる。ここまでの到達はなかなかできるものではないが、たしかにここには超克の輝きがある。特に不在証明はそこまで達している点で、賞賛したい。負いきれないものを負い続けて到達した光輝を感じた。

奨励賞でもう何人かは言及しておきたい。燻人氏（このペンネームもやりすぎか）の「第八世界自己構築・崩壊論——抄」は、よく研鑽して自己世界を構築しているが、タイトルの大仕掛けに比べて、ときおり月並みな言葉が並ぶのは、テーマを押し下げている。「なんだあれは」／「人間か」という箇所や、「バカ野郎、これは唯の悪意だ」という箇所などは、詩操を低くしている。会話体の多用が、言葉自身の飛翔力を奪っている。そうした点が是正されれば、優秀賞の力量は十分ある。

これに共通しているが、淡谷十森氏も力量は十分ながらにはより大きな意志が必要だろう。

渡邊章夫氏は「蒼穹に染まる若葉」で一見格調高い風を装いながら、ときおり「しまうのかしら」とか「よかったのにな」とか、不用意なく、だけが混じつて、流れを損ねている。表現に一貫した強さを通つていけば、もともとの志を実現できるだろう。このタイトルも日常性に添いすぎていて、飛躍のおもしろさがない。徹底と覚悟とが、もつと詩の硬度を上げていくものと思われる。意識して表現の鍛練を重ねてほしい。

惜しくも佳作に留まりはしたが、価値の高い作品について触れておきたい。

柏原宥氏の「透明な波」は現代のコンピューター社会の本質的風景を鋭く突いて切れ味の光るいい作品になっている。これを三つ重ねれば優秀賞に届いたと思われるが、他の作品「バッテリーボックス」と「山の駅」があまりに陳腐で落差がありすぎる。それが足を引っ張ってしまった。しかし「透明な波」は皆に読んでもらう価値があるので、掲載したい。

河合夏帆氏の「涙」は実生活の深い体験を詠つて迫ってくるものがある。この哀切には胸を抉られる。技巧を越えたこういう詩をもつと大切にしなければとも思う。これも掲載したい。

以下はすべて掲載の方向で考えている詩である。七羽鳩



現代詩賞選考会風景 2019.11.10 アジア文化社図書室で

# 詩の添削指導

## 詩人集団 J

### 第一線詩人による懇切な添削指導

文芸思潮編集部や第一線詩人が、あなたの詩を読み、丁寧に指導します。  
あなたの詩作力、Poemに込める言葉の力、表現力がパワーアップされます。  
面談も可能。詩の方向、創作のヒントもアドバイスしてくれます。  
あなたの詩を詩人集団Jにお送り下さい。  
連続しての指導もあります。

**詩人集団 J 事務局**  
〒158-0083 東京都世田谷区  
奥沢 7-15-13  
アジア文化社内  
TEL03-5706-7847

1編 (A4 / 2枚以内) 4000円  
2篇 (A4 / 5枚以内) 7000円  
※力がアップし優秀な作品は文芸思潮に掲載します。  
お問合せ・お申込み・詩の送付は右の事務局へどうぞ

子氏の「焼野原」は前作よりも広がりを持っていて、その点では一歩前進した意識を感じる。ただ、「秋は豊饒を連れてきた」というあたりな表現は、興が削がれる。惜しかった。掲載する際に改良してもらいたい。

インバ氏（このペンネームも一考してほしい）も挑戦の意気は感じられて発展は遂げているが、繰り返しが多いのもどかしさを感じる。壮語をどのように人の心に定着させるか、その確認をしながら詩作すると飛躍するだろう。

桐木平十詩子氏の「遠い記憶」は過去への愛情が美しく詠じられていて、私は奨励賞でもいいと思ったが、残念だった。「私が空に棲んでいる」という表現など、詩の翼の滑空の美しさは魅了される。めげずに詩作を続けてほしい。

野宮有姫氏の「みそぎ」「劇場」「乳呑児」は、詩才豊かで、何かになりそうな発想の新鮮さを感じる。「劇場」のテーマは規模の大きい逆説で、ここに封印されている現実の虚偽性は、普通の発想では暴けない。ただ「戯曲の真実の使命は観客を追い出すことにある」と最初に言ってしまうと、仕掛けそのものから遠ざかってしまう。導入に、難がある。最後まで結びつきにくい。このあたりを考慮し、計算して全体を組み立てるともつとインパクトの強いものが構築できただろう。大いに期待したい人である。

望月厚志氏も詩才を感じるが、「独立者」にあまりに「立つ」が繰り返されているところに未熟さを覚える。また全



五十嵐 勉  
いがらし つとむ  
1949 山梨県生まれ  
79「流謫の島」で群像新人  
長編小説賞受賞  
98「緑の手紙」で読売新聞・  
NTTプリンテック主催第1  
回インターネット文芸新人賞  
最優秀賞受賞  
2002「鉄の光」で健友館文学  
賞受賞  
他に中篇小説集「ノン  
チ、ヤン、NONGCHAN /  
聖丘寺院へ」長篇「破壊者  
たち」戯曲「核の信託」など

体に短い詩ばかりなので、力量を見せるには、長いものの造形も遂げてほしい。

千葉真理絵氏は、現代的な意匠にうまく事件や儀式を乗せて手際よく一つの世界を表出しているが、「葬送の季節」でも擬態語が邪魔をした。せっかくなので盛り上がりつつあるのに、「プシユ、ファアアン」では、イメージが萎んでしまう。「キーンコーンカーンコーン」もいただけない。また繰り返しが多いのも、芸が低い。今後に待ちたい。

言葉は、賭けるものによって、大きくも小さくもなり、高くも低くもなる。むろん、深くも浅くもなる。自身が言葉に何を賭けるか、その意志によって無限の変化を見せるものでもある。言葉を信頼するその祈りとも言える希求が、言葉を深く掘り下げ、広がりを集めてくる。世界に何を求め、何を糾弾し、何を歌い、何を嘆くか、鮮やかな一刃を期待したい。

# 聖遷

佐藤孝博

ナイルの輝石の戯れへ神人の半身は白波に象られる  
光が燦き泡沫の目合ひへとかき消えるたび  
閉じる臉の歪みに浮かぶ  
生誕の朝がある  
秒針の碎けた音は  
何ら意図もなく映え  
永久なる性の贖いへと  
祈することではか免れえない  
老いが盲しいていた  
ひとりきりの美貌の片鱗を蘇らせては  
所有もなく観念ですらない  
秘奥の遑をしつらえ  
類推と識別との

刻む廻廊で繋がれた  
天昏の静寂  
漫ろに溢れた樹脂の掬  
折れた茎の先から浸透し遍満する  
白い血のように  
お為ごかしの戀の実のなかで  
晩年の四季を囀り  
胤の幼さとして  
伽藍堂の遊戯をつちかう  
拉げた少女の蕾ごと  
裏庭で挽がれていたありもせぬ記憶の痕へと  
待宵は惚ける酷い残り香でしたため  
心ゆれ動く道理への拙さだけが  
無惨な愛の結末を予め宿す  
孤絶した光であると  
時には都合よく戒めて  
「世界は貨幣が齎す絶望的なまでの力の深淵を享受した  
死という欺瞞の絡繰りを体裁の美で繕う



他愛ない束の間の絆に綻んだ  
わたしたち  
主人の夢の終わりにすぎないのか」

―を  
無関心には響かないが

知り倦ねている

列なりあう

神秘の瞬きで述べて……

手つかずの幻の言語が先行し

ラフレシア<sup>死体</sup>の都市に呑み込まれた

渾沌たる戦慄のイメージで挿げ替えられていく

供儀と祭祀に架かる血と光の兆しへ

白い鬘の印象は術なくして

他界しつづける自我

即座に逝くために便宜を図り

報いは芙蓉の空に育まれた唾の末裔であった

非知という不死者もろとも

アカペー<sup>白口犠牲の愛</sup>が口で残した

己を凝視する漆黒<sup>ホ</sup>の素粒子<sup>ル</sup>

滅びゆく円穹から逸した宇宙の帰依

架空のサーガは事象の地平面へと無限なる変遷を遂げつつ

輝く太陽の明るみは白日の元に晒され

ホツマ<sup>和統</sup>の光冠が天赦した

かつての又の楽土を

幾度となく模倣するように

血の呵責が在りし日を回憶の時の羅刹へと没していく

新世紀へと旅立つ女たちの意識の羽衣<sup>ペイル</sup>から

いつしか忘れかけていた弔鐘の響きが

潺湲<sup>せんか</sup>とした川面の音に浸り翳す掌の陽射しにさんざめいて

炎天下で染まり高らかな嶽となった神威<sup>カムイ</sup>からの

純然たる石たちへの潔めの累積の果てに

塗り籠められた星々の滴りが遥か彼方まで溶け入り

妙なる辻褄合わせのような

正鵠の露草を食む

熟れた月に「躊躇<sup>ためらい</sup>い」を身籠り夜明けを待つ

運命<sup>さだめ</sup>への切なさ故に囚われた

罪のない捕虜のために

後退と流転のよしなに紐付けられ

無為自然の擬態と化して

干涸びた鯨のように

浜へ打ち上げられていた

キメラ嵌合体から枷を外す

軀のない閃光のアダムは

時を憐れみ乖離する命を羨む

截然とした滂沱を拭い去り

忽焉に臨んだ暁へふと目醒めていく

陽で濡れそぼる颯つむじかぜが珪素の眼から冴え渡った

歓喜で血塗られた裸の因果を讃え

最愛に生まれたばかりの

赤子の海へと

波打ち際には寄せては流れていた

馬酔木アセビの遺言が消えて

虚空の源からは絶え間ない

飽和への語らいだけがあつた

### 受賞の言葉

私は長い間、孤絶された境涯で、世界を観念として捉え詩作してきた。白紙と向き合う瞬間瞬間が「閑」であり、命を世界を体現するものと信じていたからだ。

苦難から詩に救いを求め、現実では決してえられない一人のみの愛と戦慄を、日常で生きる糧としていた。物を書く者にとつてそれは、自己と対峙せざるをえない業であった。

長年培われてきた詩囊が、いつしか殻を破り、現存する世界そのものを見つめはじめた。日常生活を印画して、観念をその瞬間に捉え、果てへの表現として昇華していた。すると、人々の内面が、現象世界へ露わとなり、万物はその声に輝く。日の光が満遍なく、すべてのものの袂を照らしていった。やがて、永遠に生かされていることの気づきが訪れるだろう。

私という消えゆく存在の元に、私はそれを書き留め、表現していききたい、そう思っている。

これまで支えてくださったすべての人に感謝します。本当にありがとうございました。

生い繁る樹海の日許へと

無辜という名に捧ぐ

睡蓮花の眠りのような数多の夢幻

― 忘我への足跡を辿ると末端の此処にあなたの影はすでになく

反芻する鏡の向こうで細石サザレインの成りうる

非在の精緻がある―

死が死ではなくなる瞬間への大いなる虚妄へと

生まれくる感歎の輝きがいずれ失われ

既知に光は澄み渡っていく

万有の脊髓-meta-には

磔となった骸の月日を沈めつつ



佐藤 孝博

さとう たかひろ

- 1982 東京都生まれ  
日本映画大学卒業
- 2014 第10回文芸思潮現代詩賞佳作
- 16 第12回文芸思潮現代詩賞入選
- 17 第13回文芸思潮現代詩賞優秀賞
- 18 第14回文芸思潮現代詩賞優秀賞  
(筆名/吳 宣光)

## きみはずでに

## 青木聡汰

G線上の無限に永い Aria を歌った

碧い鉛嚙み砕いて蕩けた舌の上に海産Marineまれて早幾年

しかし鼓膜海岸の茫洋に 舐め終わりの予感さえなかつた

岩肌を離れていく足裏から 潜水の寸前 無意識な息の溜め込みを覚えた人でさえ

水中花の名前を告げる刹那 深呼吸が不可欠だった

惚れ惚れなる溺死者はいまも無間で呪われ続けなければならぬ掟なの喩えば

第三次元における接吻音って第四次元まで轟き渡るのかな、鐘！

第五次元のテイ・ベアの耳剥ぎ破つたら綿毛舞い散り舞い踊るのかな、夢！

第六次元のシレーヌの鱗逆撫でたらとこしえの眠りから醒めるのかな、光！

第七次元の朧すぎる虹々混ぜ遭わせたら蜃気楼着陸してやっとな逃げ水飲めるかな、嘘！

第八次元の彼岸の河 氾濫させたらノア箱舟ごと溺れ死ぬのかな、涙！

第九次元の現世で金輪際巡り逢わない愛さえ赦すのかな、磔！

第十次元のひもで空中ぶらんこ漕ぎ続けているゆさゆさ宇宙に、花……………。

萎れ腐ってしまう季節を怯えて震えた いや 想像を超えた水の冷たさに

だから溺れに身を委ねるがままに沈め 潜みそのものが契りを拓くよう

わたしたちを零へと潰す水圧へ 犯跡さえ遺さない水深へ 水底へ

眼窩からじゆるじゆる吹き溢れる視線がきみの第五基節骨を砕いたとき

飛沫の真空へ弾け沫く真なるきみを吸い寄せる十一次元の永劫回帰がわたしたちで

第十二次元の地上へと放たれた古代魚の四肢を浸す時間の水となる

たとえ盲いた体軀が永遠をかけて凍っていく宿命だったとしても

どうか教えてください

第十三次元の空中ぶらんこが神経系の幽世から此方へ揺れ戻ってくるまでの残された時間  
どんな隠喩にもアナロジーにも抛らず

十二弦バラライカ引つ掻き鳴らす回転木馬の爪痕にも惑わされず

いかなる部族のイニシエーションによっても導かれることのない

きみの一義性Univoque de L'èreだけが

非ユークリッド空間で交わるべき平行ステップの民族移動痕を

次頁なるタブラ・ラサから描き始めるために

なお穿たれ続く密林地帯の劫雨の形状に乱調する喉仏が

あなたの歌の起源ならば劫雨は旋律の焉波ヨシノハ・思惟シユイをもたらすことを

それでもなお鼓膜は未来永劫聴いたことのない歌を始原へと送り還す地底湖に

誰にも発見されない虹が架かるまで

震えているのだから。

国の名前を叫べば叫ぶほど立方体の6つの面が私を圧縮していく  
「では立方体の名前を叫ぶとどうなりますか」  
と反響してきたこれは私の声らしい

「ここはどこ？」と白衣人形に尋ねた磨きぬかれた回廊でのすれ違いざま  
全人類人形が一斉に靴飛ばしごっこして煙に巻いたその深夜なぜか  
首都高だけが浸水するなかで何処へ泳いでいく羽目になったのか  
あの全自動球体関節人形は。

「ここが中待合室なんですか？」

今世紀的病名が私の名を連呼している

「何も答えない人になら尋ねていいですよ」

しかし診療室はどうしてか対岸に在っていまに扉が唇のように開き

「Xさんー」の呼びかけに憑かれた全自動関節人形Xが一体、橋を渡っていく

しかし対岸に降り立ったとき診療室はすでに次の橋へと発車していて  
気がつけば行列ができています

監視塔から呼び止められる名前を手掛りに

全自動関節人形Xは私の純然たるクロインであることが判明する

しかし夕闇ホリゾン트가渦巻いて街は視界ごと霧状にぼや暈けていく  
終着駅。ぞろぞろと下車する喪服人形のひとりが私の肩を叩いた

「ところで誰なんですか？あなた。ご遺族？」

陰影も余白も背景も無くただそれだけの輪郭として首輪の群れがぶかぶか浮かんでいた

高速旋回で地殻を突き破って生えてくるバベルの屋上を目指し

階を昇るごと匿名化していくエレベーターに宙ぶらりんのまま

いつしか一斉に（閉じる）ボタンを押していた

そんなにもうちへ降りたかったのか。

これで昇り電車が掠める音は聞こえなくなるとでも思ったのか。

そういや昨晚、時間が停まりましたねえ

僕の腰の窪みにお隣さんの鞆がすっぽり収まったお陰で

彼は押シクラ饅頭押サレテ泣ク刑からは救われたようですが

願わくば都市の消化器官でアミノ酸に分解されたかったみたいですよ  
ほらほら聴こえるでしょう。しれっと信仰告白なんかしちゃってさ

「車内、中へト才進ミ下サイ。神ハヒトラジグソーパズルノ似姿ニ造リ給ヒマシタ。

ナラバ我々、一度完成サセタ後デ、バラバラニシマセウ：」

もう冗談やめてくださいよ！

そしたらね。何と乗客一同一斉に、関節を外し、骨と骨をバラバラに分解し始めたんです  
あああああ尽に逃亡禁止令は敷かれてしまいました

もう手遅れになってしまった。なす術なし。はははははっ

ほらっ自動人形たちが国境線の隅々にまで網を掛けていくでしょう

おっ！ かかったな。大漁でっせ大漁。ぴちぴちぴちちっ！

引っ切りなしに懸かっっていく鱗鱗：たちに拓けていく広大な、見えますか？

あれが噂のフロンティアですよ。情報機敷。情報機敷。

完全なる無菌地帯なんですって

《傷のない第二の都市》なんて形容する人もおったり、いささかキザな世界だなあ

「34617342番号2-1」

青木聡汰

おや、どうやら私の名前が呼ばれたようです。  
名残惜しいですが、そろそろいかなきゃいけませんな。  
では。この辺で。

さようなら。

（僕は一言も返せなかった。男は高層ビルに設えられた四方を囲む巨大モニターを喰い入るように仰ぎ視る群集のなだれ込みに呑まれて視界から消えてしまう。降りしきる豪雨の狭間を縫って響いてくるこの白光りするような音楽は何だろう。徐々に推進力を増していくこのオーケストラは。覚醒する金管楽器のファンファーレ、弦楽総奏の高速旋回、ティンパニの連打が四方を囲むスピーカーから割れんばかりの爆音で轟き始める。モニターにはロベルト・シューマン・Symphonie Nr.2 Cdur, Op.61 第一楽章という字幕が流れている。スクランブル交差点の信号は一斉に赤へと転じる。急停車した巡礼の全ヘッドライトは街宣車上の一体の全自動球体関節人形を照射する。それは自らも蒼白い極光を眼球から放ち、交響曲の爛々たる拍節一小節あたり三回転とし頸を360度ぐるぐると廻し廻し銀色のメガホン越しに来るべき神託を告げる。）

「聞こえるか！我が兄弟たちよ。超伝導つるつる族よ。

皆これよりマツハ巡礼で注射器の先端から濯ぎ込むべし

かくして汝らも未来永劫夢まれることなき水鏡フロンティアの子宮内膜から  
眠る必要のなき胎児として産み落とされし宿命

今日は来るべき肅清の夜！

されば入眠剤を投与され AlmostHeaven ジャンクシヨンの



検問所を通過すれば輪転機も鏡職人も秒速で即身仏となろう  
それとももとより木乃伊となるべくして木乃伊となろう  
そこかしこに転がっている転生サピエンスの水子  
液化チャイルドの頭蓋とはまさしく汝らの頭蓋なり  
よろしいか今ここで生まれて初めて  
深淵を見つけた汝らの…

（「シューマン：Symphonie Nr.2」は最高潮に達し今や張り裂けんばかりの巨大スピーカーの  
黒い震動膜は心臓のように鼓動している。遂に締めくくりを告げる和音が全管弦楽の咆哮により  
7回強打されるのに同期して）

頭蓋！

頭蓋！

頭蓋！

頭蓋！

頭蓋！

頭蓋！

頭蓋！……！（街宣車上の自動人形、割腹し、崩れ落ちる。）

（群集沸く。）

（暗転。）

### 受賞の言葉

詩作の継続、ということに何よりも励みを与えてくださった『文芸思潮』  
諸氏に、再び拙作を選んでいただいたこと、感謝致します。祈祷と呪詛のど  
ちらの捨象も許さない群像劇を描く、ということが夢だったのだということ  
に、最近ようやく心当たり、今はまだ漠然に過ぎないそれを今後、より足元  
から掬い取れるかが課題と感じています。しかし少しでも実現できたなら、  
これほど悦ばしいことはないだろうと、その兆しに包まれています。

青木聡汰

あおき そうた

1992 北海道札幌市出身  
2012-2017 東京藝術大学音  
楽学部作曲科に在学  
2016 第12回「文芸思潮」  
現代詩賞奨励賞  
2017 第13回「文芸思潮」  
現代詩賞優秀賞  
2019年現在、横浜市在住  
作曲活動、詩作活動の両面  
での創作に励み、相互の関  
係性を模索している

真向かいのコンビニ  
レシート要りませんの一言で  
殺せるレシートがある  
言葉はいつも死産ですか  
もう歌わないぼくらよ、  
白線の外側であたたまれ  
轍の上であたたまれ  
まばたきすれば古くなるぼくらを  
今日に縛りつけておくために

# ゼブラゾーンより右折をはじめ

木田昨年

ぼくらの存在を試す春の交差点  
左車線が寒色系、対向車線に暖色系  
ぼくらは見分けることに疲れてしまった

ゼブラゾーンに風が吹く  
犬みたいな塊がびよびよと渡る  
ぼくを認識するお前をうしなってから  
ぼくの形状はひどく疲れた

ぼくらの二十一世紀は

その日たまたまこじ開けられたマンホールの蓋  
バスデーケーキから苺を一粒落とすみたいに  
ドラマチックな絶望が美味しい世代

回りくどい回りくどい

回りくどくて仄暗い場所で

ピンク色の他人がうるさい、

自意識の一片へ柔らかな蚕を飼う

あなたの唾液が伸びる伸びる

光、

誰もいない二十一世紀から鉄骨が露出する

ぼくらを透過するエネルギー体が

震えている未明に

(軟体生物の殺され方を教えてやるよ)

祝福の暴風雨、祝福の暴風雨、祝福の暴風雨、  
祝福の暴風雨、

先生、さようなら

日なたに置かれた出席名簿に

苺一粒大の赤い染み

## 木田昨年



木田昨年

きだ さくねん

福岡県在住

1996年生まれ

高校在学時に躁鬱病を発症  
入院中に詩作、歌作を開始  
する

2018年末より賞への応募  
を始め、第65回角川短歌  
賞候補など

## 受賞の言葉

人の顔を見られない。僕はありふれた一人として読む人の目を通過するかも  
しれない。美しい車の窓から火のついた煙草が飛び出してくるみたいに、僕を  
眩ませるものに疲れて、認識をやめる。しかし言葉は目を瞑っても付き纏う。  
その出処を探っているうちに僕は今日見なかった顔を認識している。詩はどこ  
にあるのか、長く見つめたいと思う。

改めてこの度、優秀賞に選んで下さった文芸思潮様へ心からの感謝と御礼を  
申し上げます。

# 第16回 文芸思潮 現代詩賞 作品募集

文芸思潮では、清新な詩作品を募集します。志操が荒廃し、言葉の真の力が失われつつある現在、日本語の奥底に流れる感情の根を洗い、美しい言葉として表現の結晶体に高める文芸の営為は、今こそ再興されねばなりません。言葉の芯をなす強靱な詩精神を鍛え、人の心の底に響き、永くそこで生き続ける言魂の作品を期待します。

## 作品募集要項

**趣旨**●真の言葉の力に溢れた詩作品を賞揚し、詩の創作エネルギーを顕彰する。由来や伝統に根差しつつ、現代に造形する、美しい日本語によって、言語の精神エネルギーの復活をめざす。また埋もれた才能や作品を掘り起こし、広く社会に知らしめ、作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与する。

**募集内容**●オリジナルの詩作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人3篇までに限る(3篇の場合まとめて送付のこと/添付別紙は全体に対して1枚のみでよい)。1篇でも2篇でもよい。

## 応募資格

※恐縮ですが応募審査料1500円を御協力くださいますようお願い申し上げます。郵便為替には無記入・無押印をお願いします。

## 応募規定

一篇は2000字以内(原稿用紙使用の場合も必ずA4原稿用紙を使用のこと。B4は失格)。3篇以内。応募審査料全体で1500円を郵便為替などで同封のこと。

ワープロ原稿はA4用紙を罫線なしで横に使い40字×30行で印字。必ず閉じること。別紙に①応募部門(2020年度第16回現代詩賞応募作品と明記のこと)②タイトル③本名およびペンネーム・それぞれふりがなを④年齢・生年月日(生年月日のないものは失格)⑤〒(郵便番号は必ず明記のこと/ないものは失格)住所⑥電話番号⑦職業・略歴⑧400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。これらを厳守しない場合は失格とする。⑨応募審査料1500円を郵便為替などで同封。外国からは14USドル。※応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取りコピーを送付のこと。

**応募先**●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」現代詩賞 係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

**賞**●文芸思潮現代詩賞■賞状・トロフィー・賞金10万円(2名7万円/3名5万円)

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円(4名以上は2万円)

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状・記念品

**選考委員**●松尾真由美・五十嵐颯

**締切**●2020年5月31日(当日消印有効)

**発表**●予選通過者は2020年9月25日発売の「文芸思潮」77号に発表。

受賞発表・最優秀賞および優秀賞作品掲載は12月25日発売の78号に発表掲載。奨励賞なども順次「文芸思潮」に掲載する。

**主催**●文芸思潮

※主催者から 痛切な心の叫び、天を射抜く鮮烈な言葉、水晶のように輝く言葉の結晶、流麗な音韻の調べ、言魂の響きを期待しています。



「文芸思潮」現代詩人賞受賞詩人の第三詩集

佐山氏にとって水の面の散乱する光の群れは、時を遡る命の騒ぎだ。詩という水の流れは、源への旅を乗せて、過去へと遡る。その旅は、自身の生の意味を問いかける。「水の流れ」は自身の命の意味への深い問いだ。 [文芸思潮] 五十嵐 颯

1620円(税込/送料共)  
御注文はアジア文化社まで



彗星はたまた駆け出すペンギン

浅見龍之介

まことの空言  
二十四篇

改訂後まで幾時もないと  
予言の鳥は告げる  
時々は私たちが  
運命を予感に落ちて  
いすかを折しおし  
しかもそのことには気づかない  
いまここから  
あらゆる時間には  
湧き出ようとする

1000円(税込)

# 詩の添削指導

## 詩人集団 J

### 第一線詩人による懇切な添削指導

文芸思潮編集部や第一線詩人が、あなたの詩を読み、丁寧に指導します。あなたの詩作力、Poemに込める言葉の力、表現力がパワーアップされます。面談も可能。詩の方向、創作のヒントもアドバイスしてくれます。あなたの詩を詩人集団Jにお送り下さい。連続しての指導もあります。

1編(A4/2枚以内)4000円  
2篇(A4/5枚以内)7000円  
※力がアップし優秀な作品は文芸思潮に掲載します。  
お問合せ・お申込み・詩の送付は右の事務局へどうぞ

詩人集団 J 事務局  
〒158-0083 東京都世田谷区  
奥沢7-15-13  
アジア文化社内  
TEL03-5706-7847